

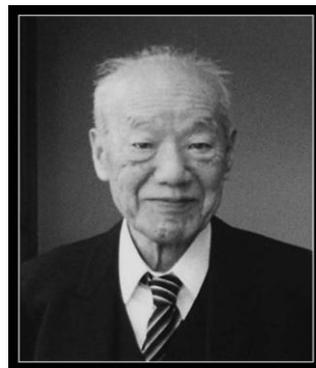
野上耀三先生を偲んで

(物理学会誌 2008 年 9 月 追悼文)

江尻宏泰

(チェコ工科大学客員教授, 大阪大学名誉教授)

ejiri@rcnp.osaka-u.ac.jp



2008 年 6 月 12 日、東京大学名誉教授の野上耀三先生は、90 年の生涯を閉じられた。先生はいつもの様に、大変穏やかな表情をしておられた。

先生は自由な発想と自主的研究を尊重された。研究室では、皆が独自のアイデアを出しては議論し、実に伸び伸びと研究に熱中、そして広い世界に羽ばたいていった。事実、先生の指導の基で育った多くの方々が、素粒子・原子核学界や放射線・原子力・医学等の関連学界・産業界等で、指導的な活躍をしている。

先生は、野上豊一郎氏（元法政大総長）と弥生子氏（元作家）の三男として 1918 年に生まれ、野上茂吉郎氏（元東大教授 原子核理論）は次兄にあたる。

東大工学部をでられ、海軍の技術将校として勤務。原爆の大惨劇を知り、原子核物理の重要性を認識し、東大理学部に再入学。嵯峨根研究室で原子核研究を志された。

野上先生が原子核にたずさわられた時期は、1950 年代から 1970 年代。戦後の原子核物理の復興期から大発展期にあたる。戦後、大阪大学や理研のサイクロトロンは米軍当局によって海に沈められ、わが国の原子核研究は困難を極めた。

研究者や関係者の努力が実り、1950 年代の半ば、全国共同利用の原子核研究所（東大附置）が、また東海村には原子力研究所が設立。各大学からは多くの研究者が新研究所に集まり、第一級の最新装置により研究がスタートした。一方、野上先生は、東大理学部にあつて、中小装置を修理・改良しながら、原子核の研究と教育に心血を注ぐ。

当時、野上研究室では、大学院の修士の頃から、実験研究を提案しては討論し、研究に没頭。理学部地下の静電加速器や、原研、日本原子力事業、東大核研、その他の新装置を使って研究を進めた。当然、研究室の外の多くの研究者と議論し、協力して頂く。先生はそんな私達の活動を見守り、応援してくれた。理学部の研究室では、皆が装置造り、修理、改良を重ね、実験の腕を磨いた。

当時、1950 年代から 1960 年代にかけて、研究室の研究は、加速ビームによ

る核反応・核分光研究という斬新なものだった。テーマは軽核の核子運動と共鳴準位、軽核の変形と回転運動、巨大共鳴、中重核の構造など多岐にわたる。これらの成果は国内外の学術誌に発表され、多くは博士論文となり、原子核構造の解明に重要な貢献をした。

1960年代になり、加速器が格段に進歩、世界的に最新鋭の加速器による原子核研究が盛んになる。私自身、欧米にあって、独自の核分光研究を大いに発展させる事ができた。一方、東大では国産のタンデム型加速器を新設する事になり、先生は10余年に亘りさまざまのご苦勞をされたと言う。先生初め、関係者の大変なご努力とご協力が実り、1970年代半ばには実験研究が再開。重イオン反応、アイソスピン共鳴、少数多体系などの興味ある研究論文が発表され、何人かの博士が誕生。また、先生は原子力総合センターの新設や、その初代センター長を勤めるなど、広い分野での研究と教育に尽力された。

先生は特に学生の教育に熱心に取り組み、また若手の活動や技官の仕事にも心を配る。5月祭の装置造りに徹夜して手を貸して下さった先生が印象的で、大学院は野上研にしたと八木さん（浦和大学長）は語っている。1979年に東大を定年でご退官。その後も、10余年に亘り明星大学工学部教授として大学教育に力を注ぐ。先生を慕い、人々はよく集まっては先生ご夫妻を囲んで話を弾ませた。

先生のご活躍は、研究室を超え、広く学内外に及ぶ。学内にあっては、諸々の委員や任務を引き受けた。学外では、特に平和や環境の問題に強い関心を示され、60年安保闘争、9条を守る会、原水爆禁止運動とその統合等にも随分と力を注いでいる。軽井沢の山荘では、大学村の理事長として、自然環境を守る運動をリードされた。

先生は、大学人・学者・教育者として、そして何よりも人間として、精一杯尽された。このような先生の真摯な生き方と心の広さは、沢山の人々に大きな感銘を与えている。

最近は大調を崩され、ここ数年は入退院を繰り返す。今回は肺炎なので、誰もが間もなく退院して帰ってこられるものと思ったと言う。しかしながら、入院中の先生は、その日の三枝子夫人のご葬儀を見届け、日没とともに夫人の元に帰って行かれた。

喪主、長谷川三千子さん（埼玉大学教授）の言葉が、心にしみ、一同、なにか救われた様な気持ちになった。「母一人では心配でしたが、父も一緒に行ってくれるので安心です」。

先生は実に爽やかに、超次元の世界へ旅立たれた。